



To Forward

めざす学校像

「希望と笑顔があふれる

楽しい学校」

～前に向かって～

第1号

2023年4月10日(月)発行

人権教育のスタート～新しい教科書・教科書無償運動に学ぼう!～

4月、ドキドキしながら教室に入ってきた入学式の日。始めて入った教室で、まず目にしたのは、机に積み上げられたたくさんの教科書でした。「これからどんな勉強をするのかな?」「嬉しいなあ。」「キレイだな。」「頑張るぞ。」いろいろな気持ちで教科書を手にしたのではないのでしょうか…。

新学期になると当たり前のように配られる新しい教科書。現在、私たちが無償で手にしている教科書を買わなければならない時代があったことを知っていますか?

その頃、教科書は新学期を迎える前に各家庭でそろえることになっていました。3月になると保護者たちは古い教科書をゆずってもらったり、古くて使えないものやないものだけを買そろえたりと苦労していました。しかし、全ての教科書を買わなければならない人も当然出てくるのです。新しい教科書を全部そろえると小学校で700円、中学校で1200円ほどかかりました。1日働いても300円ほどの収入しかない時代です。さらに兄弟姉妹が多くいたらどうですか?この教科書購入は、保護者への大変な負担となることがありました。

高知県のN地区では昔から農地が少なく、漁業と言っても細々と続けるくらいで、仕事らしい仕事とはいえませんでした。1960(昭和35)年ごろになると、物価も値上がりをはじめ、教育費の保護者負担を軽くしようという動きも出はじめました。このころ、N地区の中でも、学校の先生たちや市民会館の館長さんといっしょにお母さんたちの読書会がはじまりました。2年ほどたつうちに、「わたしたちが習った歴史と今の子どもたちが習っている歴史は全然ちがう。わたしたちも子どもの教科書を使って勉強し直そう。」という声が出はじめ、憲法の学習もはじまりました。

その中で、憲法26条に記されている

『すべて国民は、法律の定めるところにより、その保護する子女に普通教育を受けさせる義務を負う。義務教育は、これを無償とする。』

という部分が問題になりました。

「義務教育はこれを無償とするというのだから、教科書を買うのはおかしいのではないか。」

「教科書はもともと政府が買い与えるべきものだ。」

「教科書がただでないということは、憲法で定められたことが守られていないということではないか。」

この憲法26条に出会った母親たちは、話し合いの環を広げ“教科書をタダにする会”を結成し、教科書だけでも無償で子どもたちが手にすることができないものかという願いを、1600名の署名に託して教育委員会に求めていきました。

「わたらの活動は、誰っちゃあからも後ろ指さされやせん運動じゃ。」

「この闘いは、わたらの一番大事な憲法を守る運動ぞね。」

こうした運動は人間としての誇りと確信に満ちたものでした。その熱は高知だけにとどまらず大阪などにも広がり、部落解放運動を中心とした多くの力によって政府を動かしました。1963年には“義務教育諸学校の教科用図書は無償措置に関する法律”が公布され、現在のように全ての小中学校の子ども達に教科書が無償配布されるようになったのは1969年からです。

私たちにあって教科書を手に勉強することは当たり前のことです。しかし、この当たり前のことが現実になるまでには、「全ての子どもに勉強をさせてやりたい」と強く願う人々の心と、信念を貫くために立ち上がった行動力があったことを忘れてはなりません。

参考(高知市立長浜小学校の教科書無償運動50周年記念パネル展,わたしの願い)

国境をこえて

香港日本人学校中学部 2年
村瀬 広高（むらせ ひろたか）
（第30回 全国中学校人権作文コンテスト 海外作品）

ぼくは、今まで4つの外国に暮らし、いろいろな国の人たちの中で育ってきた。

まず、タイで生まれて、タイ人のメイドさんやドライバーさんに、いつも遊んでもらっていたらしい。一才になると、週一回の体操教室にも通い、タイ人の友達もいたそうだ。

次に、シンガポールでは、初めてナサリースクール(保育園)に通い、いろいろな国の友達を知り合った。プレイルームにある滑り台を滑る順番争いで、いつも勝つのはからだの大きい金髪の友達だった。

一回目の香港生活では、英語の幼稚園に通った。その時のぼくが一番の友達はカナダ人だった。彼とはよくパイブレードをして遊んだが、父が日本の出張で買ってきてくれた独楽やけん玉をして遊ぶこともあった。

それからインドでは、日本人学校に通ったが、夏休みには、毎年アメリカンスクールのサマースクールに参加したし、日本人のいない現地のテニススクールにも入り二年間通った。また、インドの現地幼稚園に通っていた妹のベストフレンドはコンゴ人で、その兄弟もぼくの友達だった。

そして、三年間の日本生活を経て、今また香港に戻ってきた。

このように、ぼくは、いろいろな国で、いろいろな国の人たちのお世話になり、いろいろな国の友達と遊んで育った。肌が真っ黒な友達も、ゲームの話をするたびに仲良くなれたし、髪が金色の友達も、ポケモンの話をすれば気が合った。ぼくは、小さい頃から英語はうまくしゃべれなかったけれども、ジェスチャーをつけたでたらめ英語でも十分に話は通じた。だから、いろいろな国の人たちの中で、ぼくは日本人だからといって、差別されたり嫌な思いをしたりしたことはないし、ぼくも、肌の色が違うからとか言葉が通じないからという理由で、違う人間だと思ったことはない。そう、ぼくは外国人を差別したことはない。

しかし、本当にぼくは、外国人を差別したことがないのだろうか。外国人を差別した発言を一度もしたことがないかと考えると自信がない。

例えば、香港人には赤信号でも平気で渡る人がたくさんいる。それを見て、ぼくは、「香港人はしょうがないな。」と思う。でもよく見ると、香港人全員が信号無視をしているわけではない。また、世界には、今でも戦争をしている国がいくつもある。「人を傷つけ合うなんて馬鹿げている。」とぼくは悲しくなる。でも、それも好きで戦っている人がいるとも思えない。その人たちがそうなったのには、何かきっと原因があるはずだ。

逆に、外国人から見ると、日本人はどのように思われているのだろう。

インドから日本に帰国した時、毎日ごみがたくさん出ることに、ぼくはとても驚いた。インドの人たちがよく使う道端にカレー屋さんでは、バナナの葉で作ったお皿にカレーを入れてくれる。食べた後、そのお皿を道に捨てると、のら牛がその葉っぱを食べる。そして、牛のふんは燃料になるという。それに比べて、日本は、ちょっと歩くとペットボトルの飲み物が増え、ファーストフードのお店では使い捨ての食器を使い、立派なお菓子の箱を開けると中身が少なくてがっかりすることもある。ある時、母が捨てたジャムの空き瓶を、メイドさんとエアコンの修理にきていたワーカーさんとが取り合って、けんかをしていたこともあった。それを見て、ぼくはあきれってしまったが、逆にインド人から見ると、使い捨て文化のしみついた日本人はとんでもない人間に見えるのかもしれない。国によって考え方や行動パターンが違うのは、歴史的背景や宗教、習慣、気などのいろいろなことが関わっているのだと思う。

このように考えると、差別とは、その人の一部しか見ていないことや、自分のやり方だけが正しいと思うことからおきるのではないかと思う。その人が自分とは違った行動をとったとしても、それには深い理由があるのだろうと考えれば、きっと納得できると思う。ぼくも、これからは否定的な発言をする前に、その人たちのことをいろいろな角度から見て理解する努力を試みようと思う。外国との間には、自分の国とは違う言葉や文化という壁があるとみんな言うが、そこにあるのは、壁ではなく橋だと思う。理解し合おうという気持ちがあれば、きっと誰でもその橋を渡っていけるはずだ。気持ちの国境をこえるのにパスポートはいらない。お互いを理解し合おうと思う気持ちが一番大切だと思う。そして、ぼくは、これから日本人として生きるのではなく、地球人として生きていこうと思う。